

主 題：アブラハムの救い7－救いは神の力による－

聖書箇所：ローマ人への手紙 4章22－25節

アブラハムの信仰について私たちは学んでいます。「心が不可能だ、また、無理だと叫ぶとき、それでも主なる神が約束されたことだから私は信じる」、それがアブラハムでした。望みがもてないときにも主に望みを置くのが信仰です。しかし、私たちがはき違えてはならないことは、望みさえすれば何でも、そして、疑わなければ与えられるというのではないということです。ある人は、信仰が足りないから与えられないのだとか、信じることがないから与えられないと教えることがあります。自分の欲しいものを一生懸命信じると必ず与えられると、そのようなことをアブラハムは私たちに示したのではありませんでした。彼は自分の欲しいものを手に入れるために主を信じたのではありません。もうすでに見た4：20には「彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、」とあり、21節にも「**神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。**」とあります。「**堅く信じた**」とはそこに確信をもった、神の約束に確信を置いたということです。神がこれまでになさったことがアブラハムに強い確信をもたらしました。神は常に真実なお方であったと。だから、神には約束を実行する力がある、約束を実行することが可能であると、パウロはそのように教えるのです。アブラハムは神が言われたことから、神の約束だから、たとえ、私たち人間が不可能だと思えることでも、また、絶対に無理だと思うことでも、神が言われたことは必ず実現すると、それがアブラハムの信仰でした。前回も見たように、ヘブル人への手紙11：1に神に喜ばれる信仰のことが記されています。「**信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。**」と。神のみこころは必ず成る、目に見えるから信じるのではなく、神が言われたから信じるのです。約束の成就を見て信じるのは信仰ではありません。その成就を見なくても神のおことばだから信じる、それが信仰です。ジョン・カルヴィンはこのように言っています。「信仰は我々の弱さ、我々の悲惨、我々の欠陥を顧慮すべきではなく、もっぱら神の力にのみ目を注ぎ、全的に信頼し切るべきである。」と。これが私たちが学んで来た、望みがもてないときに望みを抱いて信じるというアブラハムの信仰です。このような信仰をもっていたから彼は何があってもその信仰をぐらつかせるということはなかったのです。「**反対に、信仰がますます強くなって、**」とパウロが教えている通りです。このアブラハムの信仰を見るとき、私たちは少なくとも二つのことを学ぶことができます。アブラハムのように、神が言われたことは必ずそうなると思いきった信仰は、私たちに次の二つのことを教えるのです。

◎アブラハムのようなすばらしい信仰が私たちに教えること

1. 世に対するすばらしい証になる

もし、私たちクリスチャンがこのアブラハムと同じように、神が言われたことは必ずそうなる、このみことばに神が記された約束は必ずそうなるという信仰です。そのような信仰を私たちがもって歩むなら、間違いなくこの世に対するすばらしい証となります。主の栄光をこの世に証することになります。神はご自分の約束を成就なさるとき、ご自身の栄光を現わされます。私たちがアブラハムと同じように、このような信仰をもって歩むなら、人々に対して、自分の信じている神が全能の神であり、常に最善をなさる神であることを証することになるのです。なぜなら、人々がどのように言おうと、神がこう言われたから私は信じると思証するなら、少なくとも、聞いている人たちは、この人はこのように強い確信を置いて信じている神が全能の方だとこんなに強く確信していると知るからです。そうすることによって私たちは私たちの神がどのような方かを世に証するのです。神はご自身のみわざを通してご自身の栄光を現わしておられます。私たち信仰者も感謝なことに、神とともに神の栄光を世に現わして行くことができるのです。ですから、私たちは不信仰によってこの働きを邪魔する者になってはいけません。もし、クリスチャンと言っている者が神の約束を疑っているなら、世に対して私たちの神は信頼に値しない神である、不可能がある神だと、そのようなメッセージを伝えることになるのです。そのようなことをしてはならないのです。私たちが確信をもって私たちの神は全能だと信じているなら、アブラハムと同じように、どんなときでも望みをもって期待をもって歩んで行くことが、すばらしい主の証になるのです。私たちはこのような役割を神から担っているのです。世の人々に私たちの神がいかにすばらしい神であるか、この方だけが唯一の神であると証するという、大きな役割を担っています。問題は、私たちがそのように生きているかどうかです。

2. 神ご自身への信頼の証でもある

私たち信仰者は祈るとき確かに私たちの願いをもって神の前に祈っています。私たちはたとえその答

えが自分の祈り求めて来たことと違って、唯一、最善を知っておられる主のみこころを喜んで受け入れたいとするなら、私たちがこの神を信頼しているということを現わすことになっているのです。「神さま、私はあなただけが最善をご存じである神であることを知っています。私はこのことを確かに願いました。けれども、あなたのみこころが最善であるゆえに、私はあなたを信じます。」と。ですから、そのように神のみこころに喜んで従って行くことは、私たちの神に対する信頼の証です。この方は神です。何が最善かを知っておられる唯一のお方です。私たちクリスチャンにとって素晴らしいことは、この神にすべてをゆだねて歩んで行くことができることです。私たちがみこころを求めて生きるというのは何と素晴らしいことでしょうか。言い方を変えるなら、最善を知っておられる神にゆだねて、そのお方に導いて行っていただくことです。そのような歩みをする者へと変えられたのです。神に対する信頼、どんなことがあっても神を信頼し続けるという信仰は、この世に対する素晴らしい神の証であり、同時に、私たちの神に対する信頼の証でもあります。私たちはそのように生きて行きたいものです。このように本当の神がおられるということを、私たちは世に証をして行きたいです。私たちが愛してくださっている神に対して、残念ながら、失敗し恐れることもあり、疑うときもありますが、あなたを信頼していますとそのような信仰をもって、この神に私たちの信頼を現わして行きたいものです。

神に対するどのような懐疑心も神に対する冒瀆です。神のご性質やそのおことばを疑うことは、神に対する大きな罪です。人間とはその創造主なる神の前に恐れをもってひざまづくべき者です。先ほど、ヘブル11:1のみことばを見ましたが、では、私たちは果してアブラハムのような神が喜んでくださる信仰がもてるのかどうかです。私たちがすぐに思うことは、その人たちは特別だからそのような信仰生活を送れたのではないかということです。ヘブル11:2のみことばは私たちにその答えをくれます。

「昔の人々はこの信仰によって称賛されました。」とあります。つまり、この著者が言いたいことは、このように生きることが可能だということです。アブラハムが、また、多くの信仰の勇者たちが生きたように、どんなときにも神に信頼を置いて生きて行くことはできると言うのです。その秘訣について前回少し見ました。必要なことは、私たちはもっとこの神がどのようなお方であるかということを知らなければいけないということ、そして、私たちは学んだみことばを実践して行かなければ確信が出て来ないのです。実践がない人たちは信仰的に非常に弱い人です。知識はあるけれど確信していないからです。私たちの心が確信したことは行動となって現われてきます。アブラハムは限られた啓示の中で明らかにされた神を信じました。もちろん、彼の信仰がすべてにおいて完璧であったとは言えません。聖書を見ると、彼の失敗がたくさん記されています。しかし、アブラハムを見ると、カランの地を出なさいという命令があって、約束の子イサクが与えられるまで、少なくとも25年近くが経っています。そして、彼自身の信仰を見たとき、創世記12章にある通り彼は75歳でカランの地を出て行き、17章でイサクが生まれるという約束が与えられるまでの間、失敗もありましたが、神に対して忠実に従ったことは聖書が私たちに教えています。

イシュマエルが生まれたとき、アブラハムは約束どおり彼に割礼を施しました。そして、イサクにも同じように割礼を施しています。神が命じられたことだからです。創世記22章を見ると、ご存じのように、イサクを全焼のいけにえとしてわたしにささげなさいという神の命令に対して、アブラハムはそれに従いました。彼は私たちと同じように罪深い者でした。しかし、彼は神が言われたことは真実である、信頼に値するとそのように信じて従い続けたのです。神のおことばに信頼を置き、神におことばの權威に従った彼がローマ4:20にあるように、神に栄光を帰したことは当然のことです。このような生き方こそが神に栄光を帰すものです。このことに関して、カルヴィンはこのように言っています。「神の与えた恵みを退け、あるいは、そのみことばに權威を帰しない以上に、神の栄光を汚し、傷つけることはない。」と。最も神の栄光を傷つけるものは神の恵みを退けることであり、神のみことばに尊敬を払わないことです。信仰の勇者たちはなぜそのように呼ばれたのでしょうか？彼らはみな神のおことばの前にひざまずいたのです。もし、私たちが神のおことばの權威を認めないなら、みことばに信頼を置かないということです。そのような生き方をすれば、あなたは残念ながら神の栄光を現わしていないということです。信仰者の皆さん、神のおことばに対する不信仰を捨て去ることで、でも、正直に言って、私たちは神のおことばを何度も学んでいながら、それを実践するとなると難しいことに気付く、神が言われることに対して疑いを抱いてしまいます。本当にこれを信じ続けていていいのだろうか？と思うこともあったはず。なぜ、私たちは神が言われていることを疑ってしまうのでしょうか？神は偉大な方だとみな知っている、神は全能だとみな知っている、それなのに私たちはなぜそのことを疑ってしまうのでしょうか？疑わないとしても動揺してしまうということはありませんか？確かに、神はそう言われるけれど、例外があるのではないですか？と。いくつかの原因が考えられますが、今、三つのことを見ましょう。

◎なぜ、神に対して疑うのか？不信仰の原因とは？

1. 恐れ

もし、私たちが恐れを抱くなら神の約束を疑ってしまいます。たとえば、将来に対する様々な不安を抱えたとき、それが現実になると私たちは動揺しませんか？これから先どうなっていくのだろう？神は守ってくれると知っているし、神は必要を与えてくれると知っている、でも、いろいろな不安を抱えてしまうのです。年老いた両親を抱えている者たち、病気の家族を抱えている者たち、これから先どうなっていくのだろうと。生活のことを心配している人もいます。これだけ学費が上がって行くと、どのように賄って行くのだろうと。病のこと、ある人は自分の死に方のことを心配します。もし、寝たきりになってしまったなら、家族に迷惑をかけることになってしまったらと、いろいろなことが私たちの周りから恐れとなって出て来たとき、神が言われたことは分かっているけれど、それをなかなか信頼し切れないのです。私たちの愛する信仰者の中に、そのような点で失敗した人たちがいます。その中の一人は皆さんもよくご存じのペテロです。彼はイエスが湖の上を歩いておられるのを見たとき、おことばを信じて自分も湖の上を歩き始めましたが、なぜ、彼は沈みかけてしまったのでしょうか？マタイ14章に記されていることです。14：28－30「すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」：29 イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。：30 ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。」。すばらしい信仰をもって湖の上を歩き始めましたが、風を見て波を見て恐れを抱いたのです。そのときに沈みかけたとあります。見るところをしっかりと見ていなければ私たちはこの「恐れ」に負けてしまうということです。確かに、いろいろな不安が私たちの周りにあります。でも私たち信仰者は、物事の背後におられてすべてのことを知っておられる神が、必要を与えるとされたことに信頼を置きます。それとも、今、あなたの前にぶら下がっている様々な恐れがあなたの心を騒がせて、神への信頼を失っていませんか？このようにして、恐れが私たちから神への信頼を奪って行きます。その恐れは個人的にそれぞれかもしれませんが、もし、あなたの心の中に主に対する信頼に動揺、恐れがあるなら、もう一度見るべきところを見なければいけません。

2. 世的な誘惑を受ける

人間の考えを優先し、その考えを選択してしまうところ、そこに問題があります。私たちの生活やもしかすると私たちの子育てかもしれません。つまり、周りのみなと同じことをしておきたいのです。そのような失敗をしたのがイスラエルの民でした。彼らは周りの国々と同じようになりたいと言いました。それまでは神制政治、つまり、神が治め、導かれる国でした。ところが、彼らは神ではなく王が治める国になりたいと言うのです。そのことはIサムエル記8章に出て来ます。なぜ、このようなことが起こったのか、私たちはその背景を少しでも知っておくことが必要です。その当時、イスラエルをさばいていた預言者はサムエルでした。サムエルが年老いたとき、自分の息子たちをイスラエルのさばきつかさとしたのです。二人の名前はヨエルとアビヤでした。彼らはサムエルと違って信仰的ではなかったのです。Iサムエル8：3「この息子たちは父の道に歩まず、利得を追い求め、わいろを取り、さばきを曲げていた。」、このような人たちが自分たちのさばきつかさになってもらうと困るとだれもが思ったのです。そこで、8：4－5「そこでイスラエルの長老たちはみな集まり、ラマのサムエルのところに来て、：5 今や、あなたは老年を召され、あなたのご子息たちは、あなたの道を歩みません。どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王を立ててください。」。確かに、長老たちが考えたこと、サムエルの息子たちに私たちをさばいてもらいたくないということには同情できます。でも、彼らの選択は神のみこころに沿ったものではなかったのです。彼らは自分たちで解決策を考えたのです。周りの国々と同じように、自分たちをさばいてくれる王を立ててほしいと言うのです。初めに、信仰的でないサムエルの息子たちにさばいてもらいたくないとしたことは正しかったでしょう。でも、彼らはそのとき神にどうするのがいいかを尋ねるのではなく、人間的な解決を考えたのです。8：7で主はサムエルにこのように言われます。「主はサムエルに仰せられた。「この民があなたに言うとおりに、民の声を聞き入れよ。それはあなたを退けたのではなく、彼らを治めているこのわたしを退けたのであるから。」、主は民が考えたこと、選択したことは間違っているとされます。これまで自分たちを治め、守り、自分たちのために戦い、そして、自分たちの必要を満たし続けてくださった神を拒んだのです。そして、他の国々と同じようになりたいと、そのような願望をもったのです。8：19－20「それでもこの民は、サムエルの言うことを聞こうとしなかった。そして言った。「いや。どうしても、私たちの上には王がいなくてはなりません。：20 私たちも、ほかのすべての国民のようになり、私たちの王が私たちをさばき、王が私たちの先に立って出陣し、私たちの戦いを戦ってくれるでしょう。」

この世からの誘惑、この世と同じようにならざることを注意しなければいけません。たとえば、私たちの生活においても、あの人たちと同じものが私にも必要であるとか、同じものを手にすることによって彼らの仲間になれる、彼らと同じように自慢できると、もし、私たちが神を知らない人たちの方に目を向けて彼らと同じようになりたいと思っているなら、大変危険です。でも、ご存じのようにそのよ

うな誘惑は常にあります。子どもたちの教育についてはどうでしょう？親業を託された者たちは、主が望んでおられることを忘れてしまうときに間違っただ道を選択します。私たち親は神が何を望んでおられるのかを覚えるべきです。有名校に入れることではありません。私たちの責任は子どもたちに私たちが神からいただいた信仰を受け継がせて行くことです。この主のすばらしさを彼らに伝え、彼らが主を信じ、そして、その信仰を次の世代に伝えて行くことです。それが神が私たちに望んでおられることです。しかし、この世は神を除いて、神のことなど信じようとしませんから、彼らはより有名な学校に入れて、より有名なところに就職させたいと願います。クリスチャンがよく気を付けておかなければいけないことは、何のために神が私たちに子どもを託してくださり、親業を託してくださったのかということです。私たちの責任は彼らがどんな学校に入るかということよりも、どのような信仰者として生きて行くかということです。神の前に立ったとき神が私たちに問われることは、どのように彼らに私たちの信仰を伝えて行ったのかということです。しかし、誘惑があります。私も受験生の子をもつ親としてよく分かります。周りから来るプレッシャーです。親として神の前にどのような責任をもらったのかをよく覚えなければいけません。私たちはいつの間にか、世の中の考えに染まってしまう危険性があるからです。私たちが子どもたちに、何をするにも主のために喜んですることを教えて行くなら、少なくとも、彼らは与えられていることを精一杯するはずで

す。私たちが世的な誘惑を受けるとき、私たちは神が何を望んでおられるのか、そのことを忘れてしまう危険性があります。

3. 自分の計画や思いがその通りに進まない

自分の思い通りに物事が進まないと、私たちは神に対して疑いをもってしまいます。私たちはいろいろなことに計画を立てますが、それがその通りに進まないと私たちは動揺してしまいます。「希望」ということばを辞書で見ると、「あることを成就させようと願い望むこと、あることの実現を望むこと」とあります。だから、それが実現しないと私たちは望みを失ってしまうのです。また、「将来に良いことを期待する気持ち」ともあります。ですから、将来が自分の思い通りに進んで行かないと、私たちは望みを失ってしまうのです。辞書が定義する「希望」とはそういうものです。よく考えてみると、私たちがこのような定義は知らなくてもそのことを実生活で経験しています。私たちはいろいろな計画を立てて、その計画が最善であると思い、その通りに物事が進んで行かないと「どうして？」と思うのです。私たちはアブラハムのことを見えています。サラのことを思い出してください。アブラハムたちがカナンの地に入って約10年経ちました。まだ、子どもが与えられません。そこでサラは自分に仕える女奴隷のハガルをアブラハムに妻として与えました。アブラハムが85歳、サラは75歳のときでした。なぜ、サラはこのようなことをしたのでしょうか？神の約束に対してその希望がぐらついたからです。彼女は神の約束を信じてそれを忍耐をもって待つことを選択しないで、自分の考え、自分の判断で最善と思えることをしたのです。もちろん、このようなことはこの当時の習慣でもありました。不妊の女は自分のしもべを夫に妻として与えて、生まれてくる子どもを彼女の子どもとしてみなすこと、それは当時の習慣でした。しかし、サラのしたことは神の前に正しくなかったのです。なぜなら、彼女は人間的な考え、判断で歩んだからです。その結果、望みを失ったのです。今、見たとおりです。このような失敗をしたサラでしたが、1ペテロ3：6ではサラのことがこのように言われています。「たとえばサラも、アブラハムを主と呼んで彼に従いました。あなたがたも、どんなことをも恐れなくて善を行えば、サラの子となるのです。」と。失敗の中でもアブラハムとともに神を見上げて歩んだサラに、このようなすばらしいことばが記されているのです。私たち信仰者はここにいてサラをさばくような立場にいません。私たちはサラの失敗を通して大切なことを学ばなければいけません。確かに、いつも自分の思い通りには物事は進みません。でも、その中であつてもし神の約束を疑ってしまうようなことがあれば、彼女と同じ失敗をすることになります。神が言われたことだからそれを信頼するというその信仰に立つことです。

もう一人、この人物を紹介しなければなりません。サムエル記第一13章、サウル王のことです。初代イスラエルの王です。13：1「サウルは三十歳で王となり、十二年間イスラエルの王であった。」。13：3-4「サウルはイスラエルから三千人を選んだ。二千人はサウルとともにミクマスとペテルの山地におり、千人はヨナタンとともにベニヤミンのギブアにいた。残りの民は、それぞれ自分の天幕に帰した。：4 イスラエル人はみな、サウルがペリシテ人の守備隊長を打ち、イスラエルがペリシテ人の恨みを買った、ということを知った。こうして民はギルガルのサウルのもとに集合した。」、ペリシテ人はイスラエルと戦うために集まって来ました。続いて5-7節「ペリシテ人もイスラエル人と戦うために集まった。戦車三万、騎兵六千、それに海辺の砂のように多い民であった。彼らは上って来て、ベテ・アベンの東、ミクマスに陣を敷いた。：6 イスラエルの人々は、民がひどく圧迫されて、自分たちが危険なのを見た。そこで、ほら穴や、奥まった所、岩間、地下室、水ための中に隠れた。：7 またあるヘブル人はヨルダン川を渡って、ガドとギルアデの地へ行った。サウルはなおギルガルにとどまり、民はみな、震えながら彼に従っていた。」、状況が分かりますか？ペリシテ人が今まさに戦い

を挑んで来ようとしているのです。その数は「戦車三万、騎兵六千、それに海辺の砂のように多い民」とあります。そこに大軍がいるのです。それを見たイスラエルの民は恐れたのです。8節に「サウルは、サムエルが定めた日によって、七日間待ったが、サムエルはギルガルに来なかった。それで民は彼から離れて散って行こうとした。」とあります。サウルはサムエルの指示を聞いていました。私が行くからそこで七日間待っていないという指示でした。ところが、サウルは七日間待ってもサムエルがギルガルに来ない、約束を守ってくれない、しかも自分の民が恐れをなして離れて行こうとしている、その様子を見て彼は「:9 そこでサウルは、「全焼のいけにえと和解のいけにえを私のところに持って来なさい。」と言った。こうして彼は全焼のいけにえをささげた。」、彼は何とか自分の力で民をここに留めようとするのです。この状況を打破するために自分なりに考えてこのような選択をしたのです。「:10 ちょうど彼が全焼のいけにえをささげ終わったとき、サムエルがやって来た。サウルは彼を迎えに出てあいさつした。:11 サムエルは言った。「あなたは、なんということをしたのか。」サウルは答えた。「民が私から離れ去って行こうとし、また、あなたも定められた日にお見えにならず、ペリシテ人がミクマスに集まったのを見たからです。:12 今にもペリシテ人がギルガルの私のところに下って来ようとしているのに、私は、まだ主に嘆願していないと考え、思い切って全焼のいけにえをささげたのです。」:13 サムエルはサウルに言った。「あなたは愚かなことをしたものだ。あなたの神、主が命じた命令を守らなかった。主は今、イスラエルにあなたの王国を永遠に確立されたであろうに。」:14 今は、あなたの王国は立たない。主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。あなたが、主の命じられたことを守らなかったからだ。」:15 こうしてサムエルは立って、ギルガルからベニヤミンのギブアへ上って行った。サウルが彼とともにいる民を数えると、おおよそ六百人であった。」、サウルの中では計画がありました。七日すればサムエルが来てくれると、その通りにならなかったとき、彼は自分なりの解決法を考えたのです。神はあなたは間違っているとされました。

なぜ、七日経ってもサムエルが来なかったのか？大切なテストです。確かにそのように言われた、でも、神が私たちを守ってくれるという約束を信じているなら、どのようなことが周りに起こって来ようと、サウルはその神を信頼することができたはずです。いろいろな試練は神が私たちに私たち自身を知る機会として与えてくださっています。神は私たちの心を知る必要はありません。確かに、申命記8:2に「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」とあり、神が知るためではなく、私たちが知るためです。どれ程自分は信仰が強いと言っても本当はどうなのか、私たちには分かっていません。私たちの信仰を私たち自身が知るために、いろいろな試練のときを神は与えられるのです。このサウルの場合もそうでした。神が言われたことを本当に信じきっているかどうかです。

アブラハムによって神に信頼すること、神に期待することを学びました。アブラハムの人生を振り返ってみてください。子どもが与えられるという約束があつてかなりの月日が経ちました。もし、75歳のときにその約束が成就していたなら、アブラハムは「自分で子どもを産むことができた」と。でも、おおよそ100歳になったとき彼は「絶対に無理なことだ」と言いました。しかし、そのときに神が働かれたのです。彼自身の周りの人たちも「これは神のわざだ」ということを見るのです。様々な機会に神はそうにご自身のみ業を現わされました。ラザロが死んで、なぜ四日経ってからイエスが来られたのか？だれもが彼は死んだと確信しました。しかし、彼をよみがえらせることによって、イエスがいたいだれなのかを明らかにされたのです。神には不可能なことがないと。ですから、クリスチャンの皆さん、このような信仰をもったアブラハム、人間的に不可能、無理だと思えるときでも、神のおことばは必ずなる、私の神は全能の神であつて言われたことは必ず実現なさる、私はそれを信じていると、そのように歩むことです。そのように信頼に値する神です。周りに、この世の様々な考えに流されてはいけません。自分の勝手に立てた計画や自分の思いに、それが思い通りに進まないからといって動揺してはいけません。神を信頼することです。神の約束にしっかり立ち、約束を与えてくださった全能の神を見ながら歩み続けてください。それこそこの世に対するすばらしい私たちの神の証であり、そして、私たちのこの神に対する信頼の証となります。そのようにして歩み続けてください。